

曠野

堀辰雄

「やぶちゃん注」先般、[ブログ](#)にて正字正仮名で電子化し、注釈を施した堀辰雄満三十  
六歳当時の書簡体小説「十月」を受け、そこで靈感が発せられて創作された「曠野」を  
正字正仮名で電子化した（先のリンクは私のブログのカテゴリ「堀辰雄」。底本は[国立  
国会図書館の近代デジタルライブラリー](#)の[角川書店昭和二三（一九四八）年刊の「堀辰  
雄作品集 六 花を持てる女」](#)所収のものを視認した。最後に原典となった「今昔物語  
集」巻第三十の「中務大輔娘成近江郡司婢語第四」の原文と訳注をオリジナルに附した。  
なかつかさのたいふむすめあふみのぐんじのひじなるといだいし

【PDF縦書版 二〇一五年五月十七日公開 藪野直史】

あらの  
曠野

忘れぬる君はなかなかつらからで

いままで生ける身をぞ恨むる

拾遺集

そのころ西の京の六條のほとりに中務大輔なかつかさたけふなにがしといふ人が住まつてゐた。昔氣質の人で、世の中からは忘れられてしまつたやうに、親譲りの、松の木のおほい、大きな屋形の、住み古した西の對たいに、老妻と一しよに、一人の娘を鍾愛いづくしみながら、もの靜かな朝夕を過すごしてゐた。

漸くその一人娘がおとなびて來ると、ふた親は自分等の生先おひさまの少ないことを考へて、自分等のほかには頼りにするものない娘の行末を案じ、種々いろいろいひ寄つて來るものうちから或兵衛佐ひやうゑのすけを選んでそれに娘をめあはせた。ふた親の心になつたその若者は、何もかもよく出來た人柄だつた上、その娘の美しさに夢中になつてしまつてゐることは、はた目にもあきららかだつた。さうしてそれからの二三年がほどといふものは、誰にとつても、何もいふところのない月日だつた。

が、さうやつて世の中から殆ど隔絶してゐるうちに、その中務大輔のところでは暮らし向きの悪くなつてゆく一方であることは、毎日女のもとに通つて來る婿にも漸くはつきりと分かるやうになつた。そのなかでは、男だけは以前と變らずに手厚いもてなしを受けてはゐた。それはかへつて男には心苦しかつた。が、女との語らひは深まる一方だつたので、男はその女のもとをばもはや離れがたく思ふやうになつてゐた。

ところが、或年の冬、中務大輔は俄かに煩わづひついで亡き人の數に入つた。それから引きつづいて女の母もそのあとを追つた。女は悲歎なげきのなかに一人きりに取り殘されて、全く途方に暮れずにはゐられなかつた。勿論、男は相變らず夜毎に來て、さういふ女をいたはり盡してはくれた。だが、世の中を知らない二人だけでは、すべてのことがいよいよ思ふにまかせなくなつて來ることは爲方がなかつた。毎日官仕に出てゆく男のためにもそれまでのやうに支度を調へることも出來惡かつた。それがことに女には苦しかつたけれども、どうすることもその力には及ばなかつた。

再び春の立ち返つた或夕方、女は端近くはなぢにゐた夫を前にして、この日頃思ひつめてゐたことを口にする決心が漸つとそのときつゝゐたやうに、こんなことを言ひ出した。

「わたくし達もこの儘かうして暮らして居りましては、あなた様のおためではないのが漸つとはつきりと分つて参りました。父母のをりました間は、それでもまだ何かとお支度などもお調へしてさし上げられてをりました。けれども、かう何かと不如意になつて來ましては、それも思ふにまかせなくなり、お出仕の折などにさぞ見苦しいお思ひもなされることがおありでございませう。ほんたうに私のことなどは構ひませぬから、どうぞあなた様のお爲めになるやうになすつて下さいませ。」

男はちつと黙つて聞いてゐた。それから急に女を遮つた。「ではこの己にどうせよといはれるのか。」

「ときどきわたくしのことが可哀さうにお思ひになりましたなら——」女は切なげに返事をした。「餘所へいらしつてゐても、その折にはどうぞいつでも入らつして下さいませ。どうしていまの儘では、見苦しい思ひをなさらずに官仕などがお出來になれませう。」

男はしばらく目をつぶつて聞いてゐた。それから急に男は女のはうへ目を上げ、素氣ないほどきつぱりと言つた。

「この己にこの儘おまへを置きざりにして往かれると思ふのか。」

それきりで、男はわざと冷やかさうに顔をそむけ、破れた築土つとせのうへに葎ひんむがやさしい若葉を生やしかけてゐるのを、そのときはじめて氣がつるたやうに見やつてゐた。

やがて女の漸つところへてゐるたやうな忍び泣きが急にはげしい嗚咽おんげんに變つていつた。

……

男は、さうやつて女のはうから別れ話をもち出されてからも、一日も缺かさず女のもとに來ながら、以前とはすこしも變らないやうに女と暮らしてゐた。しかしだんだん女の家から召使ひの男女の數も乏しくなり、築土なども破れがちになつて來、家に傳はつた立派な調度などもいつか一つづつ失はれてゆき出してゐるのが、男の目にもいつまでも分らないはずはなかつた。男の様子が昔から見るとよほど變つてきて、以前よりか一層寡黙ひくちになりだしたやうに見えたのは、それから程經てのことだつた。しかし男はその様子がさう少し變つただけで、女をいよいよゐたはり盡すやうにしてゐた。それが逢ふ

毎に女にはたまらなく思はれて、どうしたらいいのか、ただもうあぐね果てるばかりだった。

とうとうまた、或夕方、女はこらへかねたやうに言った。

「いつまでもかうしてわたくしと一緒にゐて下さるのは、わたくしは嬉しがらなくてはならないのですが、どうもそれ以上に心苦しくてなりませぬ。わたくしはかうしてあなたのお傍に居りましても、あなたのお躰れになつたお姿を見ることが出来ませぬのみならず、この頃あなた様はわたくしに隠して、何かお考へになつていらつしやるのでせう。なぜそれをわたくしに言つては下さらぬのです。」

男は物を言はずに、女をしばらく見てゐた。

「己がおまへに隠して考へごとなどをしてゐるものか」と男は何か言ひにくさうに口をきゐた。「おまへが自分のことに構はずに、己のことばかり構はうとしてゐるのが己には窮屈でならないのだ。己だつて、もう少ししたら、どうにかなるだらう。さうすれば、おまへ一人位はどうにでもしてやれるのだ。それまで、いま少し、辛抱してゐてくれ。」

男はさう言ひながら、ひと時、いかにもゐたゐたしさうな目つきで女を見た。しかし女はいつかそこに袖を顔にして泣き伏してゐた。男はしげしげと女の波うつてゐる黒髪を見てゐた。それから自分も急に目をそらせて、ふいと袖を顔にもつていった。

男がその女の家に姿を見せなくなつたのは、それから何日もたたないうちだった。

二

男が黙つてふいに立ち去つてから、それでも女はなほ男を心待ちにしながら、幾人かの召使ひを相手に、さびしい、便りたよない暮らしを續けてゐた。が、それきり男からは絶えて消息さへもなかつた。女にとつては、それは自分から望んだこととはいへ、たまらなく不安だった。待つことの苦しみ、——何物も、それを紛まぎらせてはくれなかつた。それでも女はまだしもそのなかに一種の満足を見いだし得た。——だが、いつまで立つても、男のかへつて来るあてのないことが分かつて來ると、わづかに残つてゐた召使ひも

誰からともなく暇をとり出し、みな散り散りに立ち去つて往つた。

一年ばかりのあとには、女のもとにはもう幼い童が一人しか残つてゐなかつた。その間に、寢殿は跡方もなくなり、庭の奥に植わつてゐた古い松の木もいつか伐り取られ、草ばかり生い茂つて、いつのまにか葎のからみつゝゐた門などはもう開らかなくなつてゐた。さうして築土のくづれがいよいよひどくなり、ときをり何かの花などを手にした裸か足の童がいまは其處から勝手に出はひりしてゐる様子だつた。

なかば傾いた西の對の端に、わづかに雨露をしのぎながら、女はそれでもちつと何物かを待ち續けてゐた。

最後まで残つてゐた幼い童もとうとう何處かに去つてしまつた跡には、もう一方の崩れ残りの東の對の一角に、この頃田舎から上つてきた年老ゐた尼が一人、ほかに往くところもないらしく、棲みついてゐた。それは昔この屋形で使はれてゐた召使ひの齋者だつた。さうしてその尼は此の女をかはいさうに思つて、ときどき餘所から貰つてくる菓子や食物などを持つて來てくれた。しかしこの頃はもう女にはその日のことにも事を缺くことが多くなり出してゐた。——それでもなほ女はそこを離れずに、何物かを待ち續けてゐるのを止めなかつた。

「あの方さへお爲合せになつてゐて下されば、わたくしは此の儘朽ちてもいい。」  
さう思ふことの出來た女は、かならずしも、まだ不爲合せではなかつた。

男にとつては、その一二年の月日はまたたく間に過ぎた。

しかしその間、男は一日も前の妻のことを忘れたことはなかつた。が、何かと宮仕が忙しかつた上、あらたに通ひ出してゐた伊豫の守の女の家で、懇ろに世話をせられてゐると、心のみめやかな男だつただけ、彼等を裏切らないためにも、男はつとめて前の妻のところからは遠ざかり、胸のうちでは氣にかけながらも、音信さへ絶やしてゐた。

最初のうちは、それでも男は幾たびか、人目に立たないやうにわざと日の暮を選んで、前の女のある西の京の方へ往きかけた。が、朝夕通ひなれた小路に近づいて來ると、急に何物かに阻まれるやうな心もちで、男はその儘引つ返して來た。男はこんなことで、心にもなく女とも別れなければならなくなる運命を考へた。

しかし、その儘女にも逢わずに月日が立つにつれ、もう忘れていてもいいはずのその女の何を何かのはずみに思ひ出すと、その女の、袖を顔にした、さびしい、俯伏した姿が前にも増して鮮明に胸に浮んで来てならなかった。さうしてとうとうしまひには、その女のさうしてゐるときの息づかひや、やさしい衣きぬずれの音までがまざまざと蘇るやうになり出した。

その春も末にちかい、或日の暮れがた、男はどうとう女戀しさにゐてもたつてもゐられなくなつたやうに、思ひ切つて西の京の方へ出かけて往つた。

其處いらは小路の兩側の、築土も崩れがちで、蓬よもぎのはびこつた、人の住まつてゐない破れ家の多いやうなところだつた。漸く以前通いなれた女の家あたりまで来て見ると、倒れかかつた門には葎せむしの若葉がしげり、藪には山吹らしいものがしどろに咲きみだれてゐた。

「こんな荒れてゐるやうでは、もう誰もここにはゐまい。」男は心のなかでさう考へた。

おそらくその女も他の男に見いだされて餘所に引きとられてしまつたのだらうと詮あひまめると、その女戀しさを一層切ひとしほに感じ出しながら、その儘では何か立ち去りがたいやうに、男はなほあたりを歩いてゐた。すると、築土のくづれが、一ところ、童でもふみあけたのか、人の通れるほどになつてゐた。男は何の氣なしに其處からはひつて見ると、もとは何本もあつた大きな松の木は大てい伐り倒されて、いまは草ばかりが生ひ茂つてゐた。古池のまはりには、一めに山吹が咲きみだれてゐ、そのずつと向うの半ば傾いた西の對たいの上にちやうど夕月のかかつてゐるのが、男にははじめてそれと認められた。その對たいの屋やの方は眞つ暗で、人氣はないらしかつた。それでも男はそちらに向つて女の名を呼んで見た。勿論、なんの返事もなかつた。さうなると男は女戀しさをいよいよ切に感じ出し、袖にかかる蜘蛛くもの網いを拂ひながら、山吹の茂みのなかを齧かき分けていつた。男はもう一度空しく女の名を呼んだ。男はそのとき思ひがけず反對の側にある對の屋からかすかな灯の洩れてゐるのを見つけた。男は胸を刺されるやうな思ひをしながら、そちらの方へさらに草を齧かき分けて往つて、最後に女の名を呼んだ。返事のないのは前と變りはなかつた。男は草の中から其處には一人の尼かなんぞゐるらしいけはひを確かめ

ると、頭を垂れた儘、もと来た道をあとへ引つ返した。もう昔の女には逢はれないのだと詮め切ると、それまで男の胸を苦しいほど充たしてゐた女戀しさは、突然、いひ知れず昔なつかしいやうな、殆ど快いもの思ひに變りだした。……

なかば傾ゐた西の對の、破れかかった妻戸つまどのかげに、その夕べも、女は晝間から空にほのかにかかつてゐた織い月ほろをぼんやり眺めてゐるうちに、いつか暗やみにまぎれながら殆どあるかないかに臥せつてゐた。

そのうちに女は不意といぶかしさうに身を起した。何處やらで自分の名が呼ばれたやうな氣がした。女の心はすこしも驚かさなかつた。それはこれまでも幾たびか空耳にきいた男の聲だつた。さうしてそのときもそれは自分の心の迷ひだとおもつた。が、それからしばらくその儘ぢつと身を起してゐると、こんどは空耳とは信ぜられないほどはつきりと同じ聲がした。女は急に手足が竦すくむやうに覺えた。さうして女は殆どわれを忘れて、いそいで自分の小さな體を色の褪めた蘇芳の衣のなかに隠したのが漸つとのことだつた。女には自分が見るかげもなく濼なせさらばへて、あさましいやうな姿になつてゐるのがそのとき初めて氣がついたやうに見えた。たとひ氣がついてゐたにせよ、そのときまでは殆ど氣にもならなかつた、自分のさういふみじめな姿が、そんなになつてまだ自分の待つてゐた男に見られることが急に空怖ろしくなつたのだつた。さうして女は何も返事をしようとはせず、ただもう息をつめてゐることしか出来なくなつてゐる自分の運命を、われながらせつなく思ふばかりだつた。それからまだしばらく池のほとりで草の中を人の歩きまはつてゐる物音が聞えてゐた。最後に男の聲がしたときは、もう女のゐる對の屋からは遠のいて、向ひの尼のゐる對の屋の方へ近づき出してゐるらしかつた。それからもう何らの物音もしなくなつた。

すべては失はれてしまつたのだ。男は其處にゐた。其處にゐたことはたしかだ。それを女にたしかめでもするやうに、男の歩み去つた山吹の茂みの上には、まだ蜘蛛の網いとが破れたままいくすぢか垂れさがつて夕月に光つて見えた。女はその儘荒あはらな板敷のうへにいつまでも泣き伏してゐた。……

それから半年ばかり立った。

近江の國から、或郡司ぐんじの息子が宿直のために京に上つて来て、そのをばにあたる尼のもとに泊ることになったのは、ちやうど秋の末のことだった。

それから何日かの後、郡司の息子が異様に目を赫かがやかせながら言った。「きのふの夕方、向うの壞れ残りの寢殿しんでんに焚きものを捜しに往きますと、西の對にちやうど夕日が一ぱいさし込んでゐて、破れた簾すだれごしにまだ若さうな女のひとが一人、いかにも物思はしげに臥せつてゐるのがくつきりと見えましたので、私はおどろいてその儘歸つて來てしまひましたが、あれはどなたなのですか。」

尼は當惑さうに、しかしもう見つけられてしまつては爲方がないやうに、その女の不爲合せな境涯を話してきかせた。郡司の息子はさも同情に堪へないやうに、最後まで熱心に聞いてゐた。

「そのお方にぜひとも逢はせて下さい。」息子は再び目を異様に赫やかせながら、田舎者らしい率直さで言った。「そのお方ははうでもその氣になつて下されば、わたしが國へ歸るとき一緒にお伴れして、もうそのやうなお心細い目には逢はせませんから。」

尼は、それを聞くと、まあこんな自分の甥なつかごときものがと思ひながら、それでも彼と言ふやうに女も一そそんな氣もちにでもなつた方が行末のためにもなるのではないかと考へもした。

尼はいくぶん躊躇しながらも、何時かその甥の申出を女に傳へることを諾うべなはないわけにはいかなかつた。

或野分のわき立つた朝、尼はその女のもとに菓子などを持つて來ながら、いつものやうに色の褪めた衣をかついだ女を前にして、何か慰めるやうに、

「あなた様もどうして此の儘でいつまでも居られませう」と言ひだした。「こんなことはわたくしとしては申し上げ悪いことですけれど、いまわたくしの所に近江からいささか由縁ゆかりのありますものの御子息が上京せられて來てをられますが、そのものがあなた



様のお身の上を知つて、ぜひとも國へお伴れしたいと熱心にお言ひになつて居りますけれど、いかがでございますか、一そそのもののお言葉に従ひましては。此の儘かうして入らつしやいますよりは、少しはましかと存じますか。」

女はそれには何にも返事をしないで、空しい目を上げて、ときをり風に亂れてゐる花薄の上にちぎれちぎれに漂つてゐる雲のたたずまひを何か氣にするやうに眺めやつてゐるが、急に「さうだ、わたくしはもうあの方には逢はれないのだ」とそんなあらぬ思ひを誘はれて、突然そこに俯伏してしまつた。

夜なかななどに、ときをり郡司の息子が弓などを手にして、女の住んでゐる對の屋のあたりを犬などに吠えられながら何時までもさまよふやうになつたのは、そんな事があつてからのことだつた。夜もすがら、木がらしが萩や薄などをさびしい音を立てさせてゐた。どうかすると、ひとしきり時雨の過ぎる音がそれに交じつて聞えたりした。さうでなければ、郡司の息子が、ときどき自分の怖ろしさを紛らせようとでもするのか、あちこちと草の中を歩きまはつてゐた。……

そんな夜毎に、女は妻戸をしめ切つて、ともし火もつけず、身の置きどころもないかのやうに、色の褪めた衣をかついだまま、奥のはうにぢつとうずくまつてゐた。かくも荒れはてた棲み家では、奥ぶかくなどにぢつとしてゐると、その儘何かの物のけにでも引つ張り込まれていつてしまひさうな氣がされて、女は怯え切り、殆ど寝られずに過すことが多いのだつた。

或しぐれた夕方、尼は女のところに來ると、いつものやうに沁々しみじみと話し込んでゐた。「ほんたうにいつまで昔のままのお氣もちでいらつしやるのでございませう。」尼はことさらに歎息するやうに言つた。「それは今のやうにでもして居られますうちはまだしも、此のわたくしでも若しもの事がございしたら、どうなさるお積りなのですか。しかし、やがてさういふときの來ることは分かつてゐます。」

女は數日まへのことを思ひ出した。——數日まへ、尼にその話をはじめて切り出されたとき、突然はつとして「自分はもうあのお方には逢はれないのだ」と氣づゐたときのいまにも胸の裂けさうな思ひのしたことを思ひ出した。あるときから女の心もちは急に弱くなつた。それまでのすべての氣強さは——畢竟、それはいつかは男に逢へると思つ

ての上での氣強さであつた。——女はもう以前の女ではなかつた。

その晩、尼は郡司の息子をその女のもとへ忍ばせてやつた。

それから夜毎に郡司の息子は女のもとへ通ひ出した。

女はもう詮方盡きたもののやうに、そんなものにまですべてをまかせるほかなくなつた自分の身が、何だかいとほしくていとほしくてならないやうな、いかにも悔やしい思ひをしなから、その男に逢ひつづけてゐた。

漸く任が果てて、その冬のはじめに近江へ歸らなければならなくなつたときには、郡司の息子はもうすつかり此の女に睦んで、どうしてもその儘女を置きざりにして往く氣にはなれずにしまつた。

女はそれを強ひられる儘に、京を離れるのはいかにもつらかつたけれど、しかし自分の餘りにもつたなかつた來しかたに抗ふやうな、さうして何か自分の運を試めしてみやうな心もちにもなりながら、その郡司の息子について近江に下つていった。

#### 四

しかしその郡司の息子には、國元には、二三年前にめとつた妻が残してあつた。さうして親達の手まへもあり、息子は、その京の女をおもてむき婢として伴れ戻らなければならなかつた。

「そのうちまた、わたくしは京に上るはずですよ。」息子は女を宥めるやうにして言つた。「その折にはきつと妻として伴れて往きますから、それまで辛抱してゐて下さい。」女はそんな事情を知ると、胸が裂けるかと思ふほど、泣いて、泣いて、泣き通した。——すべての運命がそこにうち挫かれた。

が、一月たち二月たちしてゐるうちに、——殆ど誰にも氣どられずに婢として仕へてゐるうちに、——かうしてゐる現在の自分がその儘でまるきり自分にも見ず知らずのものでもあるかのやうな、空虚な氣もちのする日々が過ぎされた。いままでの不爲合せな來しかたが自分にさへ忘れ去られてしまつてゐるやうな、——さうして、そこには、自

分が横切つてきた境涯だけが、野分のわきのあとの、うら枯れた、見どころのない、曠野あらしのやうにしらじらと残つてゐるばかりであつた。「いつそもうかうして婢はしためとして誰にも知られずに一生を終へたい」——女はいつかさうも考へるやうになつた。

此處に、女は、まったく不爲合せなものとなつた。

山一つ隔てただけで、こちらは、梢にひびく木がらしの音も京よりは思ひのほかにはげしかつた。夜もすがら、みづうみの上を啼き渡つてゆく雁もまた、女にとつては、夜々をいよいよ寢覺めがちなものとならせた。

それから數年後の、或年の秋、その近江の國にあたらしい國守が赴任して來て、國中が何かとさわぎ立つてゐた。

國內の巡視に出た近江の守の一行が、方方まはつて歩いて、その郡司の館のある湖みづうみにちかい村にかかつたときは、ちやうど冬の初で、比良ひらの山にはもう雪のすこし見え出した頃だつた。

その日の夕ぐれ、丘の上にあるその館では、守かみは郡司たちを相手にして酒を酌みかはしてゐた。

館のうへには時をり千鳥のよびかふ聲が鋭く短くきこえた。——すつかり葉の落ち盡した柿の木の向うには、枯蘆のかなたに、まだほの明るいみづうみの上がひつそりと眺められた。

守かみは、すこし微醺を帯びたまま、郡司が雪深い越こしに下つてゐる息子の自慢話などをしてゐるのをききながら、折敷せしきや菓子などを運んでくる男女おとこの下衆げすたちのなかに、一人の小がらな女に目をとめて、それへちつと熱心な眼ざしをそそいでゐた。他の婢と同様に、髪は巻きあげ、衣も粗末なのをまとつてはゐるが、その女は何處やら由緒ありさうに、いかにも哀れげに見えた。その女をはじめて見たときから、守の心はふしぎに動いた。宴の果てる頃、守は一人の小舎人童こどねりわらわを近くに呼ぶと、何かこつそりと耳打ちをした。

その夜遅く、京の女は郡司のもとに招ぜられた。郡司は女に一枚の小桂こけいを與へて、髪なども梳いて、よく化粧してくるやうにと言ひつけた。女は何んのことか分からなかつ

たが、命ぜられたとほりの事をして、再び郡司の前に出ていった。

郡司はその女の小桂姿を見ると、傍らの妻をかへりみながら、機嫌好きそうに言った。

「さすがは京の女ぢや。化粧させると、見まぢがふほど美しうなつた。」

それから女は郡司に客舎の方へ伴れて往かれた。女は漸つと事情が分つて來ても、押し黙つて、郡司のあとについてゆきながら、何か或強い力に引きずられて往きでもしてゐるやうな空騒な自分をしか見出せなかつた。

守の前に出されると、ほのぐらい火影ほかげに背を向けた儘、女は顔に袖を押しつけるやうにしてうづくまつた。

「おまへは京だそうだな。」守はそこに小さくなつてゐる女のうしろ姿を氣の毒さうに見やりながら、いたはるやうに問うた。

「……」女はしかし何とも答へなかつた。

さうして女は數年まへのことを思ひ出した。——數年まへには、田舎上りの見ず知らずの男に身をまかせて京を離れなければならなかつた自分が自分でもかはいさうでかはいさうでならなかつた。さうしてそのときは相手の男なんぞはいくらでもさげすめられた。が、こんどと云ふこんどは、その相手がかへつて立派さうなお方であるだけに、さういふ相手のいひなりにならうとしてゐる自分が何だか自分でもさげすまずにはゐられないやうな——さうしていくら相手のお方にさげすまれても爲方のないやうな——無性にさびしい氣もちがするばかりだつた。女にしてみると、かうして見出されるよりは、いままでのやうに誰にも氣づかれずに婢としてはかなく埋もれてゐた方がどんなに益ましか知れなかつた。……

「己はおまへを何處かで見たやうなふしぎな氣がしてならない。」男はもの靜かに言つた。

女は相變らず袖を顔にしたぎり、何んといはれやうとも、懶ものうげに顔を振つてゐるばかりだつた。

館のそとには、時をりみづうみの波の音が忍びやかにきこえてゐた。

そのあくる夜も、女は守かみのまへに呼ばれると、いよいよ身の置きどころもないやうに、

いかにもかぼそげに、袖を顔にしながら其處にうづくまつてゐた。女は相變らず一ことも物を言はなかつた。

夜もすがら、木がらしめゐた風が裏山をめぐつてゐた。その風がやむと、みづうみの波の音がゆうべよりかずつとはつきりと聞えてきた。をりをり遠くで千鳥らしい聲がそれに交じることもある。守はいたはるやうに女をかきよせながら、そんなさびしい風の音などをきいてゐるうちに、なぜか、ふと自分がまだ若くて兵衛佐だつた頃に夜毎に通つてゐた或女のおもかげを鮮かに胸のうちに浮べた。男は急に胸騒ぎがした。

「いや、己の心の迷いだ。」男はその胸の靜まるのを待つてゐた。

突然、男の顔から涙がとめどなくながれて女の髪に傳はつた。女はそれに氣がつくと、いかにも不審に堪へないやうに、小さな顔をはじめて男のはうへ上げた。

男は女とおもはず目を合わせると、急に氣でも狂つたやうに、女を抱きすくめた。「矢張りおまへだつたのか。」

女はそれを聞いたとき、何やらかすかに叫んで、男の腕からのがれようとした。力のかぎりのがれようとした。「己だと云ふことが分かつたか。」男は女をしつかりと抱きしめた儘、聲を顫はせて言つた。

女は衣きぬずれの音を立てながら、なほも必死にのがれようとした。が、急に何か叫んだきり、男に體を預けてしまつた。

男は慌てて女を抱き起した。しかし、女の手に触れると、男は一層慌てずにはゐられなかつた。

「しつかりしてゐてくれ。」男は女の背を撫でながら、漸つといま自分に返されたこの女、——この女ほど自分に近い、これほど貴重たいじなものはないのだといふことがはつきりと身にしてみ分かつた。——さうしてこの不爲あき合せな女、前の夫を行きずりの男だと思ひ込んで行きずりの男に身をまかせると同じやうな詮あきらめあきで身をまかせてゐたこの惨めな女、この女こそこの世で自分のめぐりあふことの出來た唯一の爲合せであることをはじめて悟つたのだつた。

しかし女は苦しやうに男に抱かれたまま、一度だけ目を大きく見ひらいて男の顔をいぶかしやうに見つめたきり、だんだん死顔に變りだしてゐた。……

■原典

「やぶちゃん注：以下は堀辰雄が本「曠野」の原拠とした「今昔物語集」巻第三十「中務大輔娘成近江郡司婢語第四」である。底本は池上洵一編「今昔物語集 本朝部 下」（岩波文庫二〇〇一年刊）を用いたが、恣意的に漢字を正字化し、読みは必要と思われる箇所には歴史的仮名遣でオリジナルに附し（一部、底本に従わない読みを附した）、一部は私が追加した（底本は現代仮名遣）。また、記号の一部を変更した。」

中務の大輔の娘、近江の郡司の婢と成れる語 第四

今昔、中務の大輔の口と云ふ人有けり。男子は無くて、娘只獨のみぞ有ける。家貧かりけれども、兵衛の佐の口と云ける人を其の娘に會せて、智として年来を經けるに、此彼構て有せけるに、智も去難く思て有ける程に、中務の大輔失にければ、母堂一人して、萬を心細く思けるに、其れも指次煩て、日来に成にければ、娘、糸哀れに悲く歎ける程に、母堂も失にければ、娘獨り殘居て、泣悲ひけれども甲斐無し。漸く家の内に人も無く出畢にければ、娘、夫の兵衛の佐に「祖御せし限は、此彼構て有せ聞えしを、此く便無く成にたれば、其の御繚なども不叶。官仕は何でか見苦くても御せむ。只、何かにも吉からむ様に成り給へ」と云ければ、男、糸惜くて、「何かで見棄むずるぞ」となど云て、尚棲けれども、着物なども見苦く、只成りに成り持行けば、妻、「外也とも、糸惜と思給はむ時は、音信給へ。何かでか、此ては官仕へはし給はむ。見苦き事也」と、強に勧めれば、男、遂に去にけり。去れば、女獨りにて、彌よ哀れに心細き事限無し。家も澄て、人も無かりければ、只幼き童一人なむ有けるも、衣着る事も無く、物食ふ事も難くて、破無かりければ、其れも出て去にけり。

男も、然こそ、「糸惜」と云けれども、人の智に成にければ、音信をだに不爲ざりければ、出て其れも云はむや、來る事は絶にけり。然れば、様悪く壞たる寢殿の片角に、幽にてぞ獨り居たりける。

其の寢殿の片端に、年老たる尼の宿て住けるが、此の人を哀れがりて、時と菓子・食物

など見けるをば、持來つゝ志ければ、其れに懸りて年月を経ける程に、此の尼の許に、近江國より長宿直と云ふ事に當て、郡司の子なる若き男の上たりけるが宿て、其の尼に、「徒然なる女の童部求めて得させよ」と云ければ、尼、「我れは年老て行も不爲ねば、女の童部の有らむ方も知らず。然て、此の殿にこそ、糸嚴氣に御する姫君は、只獨り有難氣にて御すれ」と云ければ、男、耳を留て、「其れ己に會せ給へ。然て、心細くて過し給はむよりは、實に嚴くは、國に將下て妻にせむ」と云ければ、尼、「今、此の由を云はむ」と受けり。

男、此く云ひ始めて後は、切に切て責め云ければ、尼、彼の人の許に菓子など持行たる次でに、「常には何かでか此ては御まさむと爲る」など云て後に、「此に、近江より、可然べき人の子の上たるが、『然て御ますよりも、國に將下り奉らむ』と、切々に申し候ふを、然様にもせさせ御ませかし。此く徒然に御ますよりは」と云ければ、女、「何かでか然る事はせむ」など云ければ、尼返ぬ。

此の男、此の事を切に思て、弓など持て、其の夜、其の邊を行ければ、狗吠て、女、物怖しく常よりも思えて、侘しく思ひて居たりける程に、夜明て、尼亦行たるに、其の人云く、「今夜こそ物怖しく破無かりつれ」と。尼、「然ればこそ申し候へ、『然申す者に打具して御ませ』とは。侘しき事のみこそ御まさむずれ」と云成しければ、女、『實に何がせまし』と思たる氣色を、尼見て、其の夜忍て此の男を入れてけり。

其の後、男馴睦びて、不見習はぬ心に難去く思て、近江へ將下ければ、女も、『今は何がはせむ』と思て、具して下にけり。其れに、此の男、本より國に妻を持たりければ、祖の家に住けるに、其の本の妻、極く妬み妬みければ、男、此の京の人の許には寄も不付ず成にけり。然れば、京の人、祖の郡司に被仕て有ける程に、其の國に新しく守成て下給ふとて、國擧て騒ぎ合たる事限無し。

而る間、「既に守の殿御ましたり」とて、此の郡司の家にも騒ぎ合て、菓子・食物など器量く調へ立て、館へ運びけるに、此の京の人をば、「京の」と付て、郡司年來仕けるに、館へ物共運けるに、男女の多く入ければ、此の京のに物を持せて館へ遣けり。

而る間、守、館にて多の下衆共の物を持運ぶを見ける中に、異下衆にも似ず、哀れに故有て京のが見えければ、守、小舎人童を召て、忍て、「彼の女は何なる者ぞ。尋て

夕ゆふさり參まゐらせよ」と云いければ、小舍人童尋せうじんどうぬるに、然しかこの郡司ぐんじの徒者とももの也。聞きて、郡司ぐんじに、「此かくなむ、守かうの殿御覽てんごらんじて仰おほせらるる」と云いければ、郡司ぐんじ驚おどろて、家かに返かへり、京きやうの湯浴ゆあみし、髪洗かみあらせ、と返かへす傳立かじつきたて、郡司ぐんじ、妻めに、「此かくれ見みよ、京きやうのが爲したちたる様ようの美うらさを」とぞ云いける。然さて、其そのの夜よ、衣きぬなど着きたせて奉たててけり。

早はやう、此このの守かみは、此このの京きやうのが本もとの夫むとの兵衛ひやうゑの佐すけにて有ありし人なりの成なりたりける也なりけり。然されば、此このの京きやうのを近めく召寄めしよせて見みけるに、怪あやしく見みし様ように思おぼえければ、抱いだて臥ふしたりけるに、極きはめて睡すましかりければ、「己おのれは何いかなる者ものぞ。怪あやしく見みし様ように思おぼゆるぞとよ」と云いければ、女を、然さも否心えいこころ不得えざりければ、「己おのれは此このの國くにの人ひとにも非あらず。京きやうなむ有ありし」なむ許ばかり云いければ、守かみ、『京きやうの者ものの來きたりて、郡司ぐんじに被つかはれるにこそと有ありらめ』など、打思うちおもひ有ありけるに、女をの娥うらへ思おぼえければ、夜よと召よけるに、尚なほ怪あやしく物哀ものあはれに、見みし様ように思おぼえければ、守かみ、女をに、「然さても、京きやうには何いかなり也なりし者ものぞ。可か然かきにや、哀いとほしに糸惜いとほしと思おもへば云いふぞ。不か隠かくさで云いへ」と云いければ、女を、否えか不か隠かくさで、「實まことに然しかじか有ありし者もの也なり。若かし、舊ふるき男をとこにて有ありし人ひとの故ゆゑなどにてても御おほますらむと思おもゆれば、日ひ來きは申まをさざりつるに、此こく強あながちに問とはせ給たまへば申まをす也なり」と、有ありのまゝに語かたりて泣なければ、守かみ、『然さればこそ、怪あやしく思おもつる者ものを。我われが舊ふるき妻つまにこそ有ありけれ』と思おもふに、奇あさましく、涙なみだの泛こぼる氣け無なしに持もて成なして有ありる程ほどに、江えの浪なみの音聞おとえければ、女を、此これを聞きて、「此こは何なにの音おとぞとよ。怖おそしや」と云いければ、守かみ、此こなむ云いける。

これぞこのつひにあふみをいとひつゝ

世にはふれどもいけるかひなみ

とて、「我われは、實まこと然ごとくには非あらずや」と云いて泣なければ、女を、『然さは此こは我われが本もとの夫むと也なりけり』と思おもふに、心こころに否えか不か堪たへざりけむ、物ものも不い云いはずして、只ただ氷ひに氷ひ瘡すくみければ、守かみ、「此こは何なにに」と云いて騒さわげる程ほどに、女を失なしにけり。

此これを思おもふに、糸哀いとせれる事こと也なり。女を、『然さにこそ』と思おもふに、身みの宿世しよくせ思おもひ被やられ、恥はかしさに否えか不か堪たへで死しにけるにこそは。男おとこの心こころの無なかりける也なり。其そのの事ことを不あ顯あらさずして、只ただ可か養育やしやういくかりける事ことを、とぞ思おもゆる。



此の事、女死しにて後の有様ありさまは不知しらず、となむ語り傳つたへたるとや。

■やぶちちゃん注

以下に示す「伊勢物語」第六十二段は圧縮されているが、シチュエーションと隠されたロケーション（近江）の酷似から本話の源泉を共にする異伝と考えられよう。

\*

昔、年ごろおとづれざりける女、心かしくくやあらざりけむ、はかなき人の言ことにつき、人の國なりける人に使はれて、もと見し人の前に出で來てもくの食はせなどしけり。夜さり、「このありつる人たまへ」と、あるじに言ひければ、おこせたりけり。男、「われをば知らずや」とて、

いにしへのにほひはいづら櫻花

こけるからともなりにけるかな

といふを、いと恥づかしと思ひて、いらへもせでるたるを、「などいらへもせぬ」と言へば、「涙のこぼるるに、目も見えず、物も言はれず」といふ。

これやこのわれにあふみをのがれつつ

年月としひふれどまさりがほなき

といひて衣ぬぎて取らせけれど、捨てて逃げにけり。いづちいぬらむとも知らず。

\*

この「伊勢」の和歌を注しておく、「いづら」不定代名詞「どこ」「どこ」であるが、「こけるから」は感動しての「おやうまあ、どうした」の意をも含ませるものである。「こけるから」は「扱こける幹かぢ」で「花を扱こき落おしてしまった桜の枝」、女の容色のすっかり衰えたこと

を指す。「あふみ」夫たる私と「逢ふ身」に「近江」を掛けるから、ここの「近江」はこの元の夫と住まいしていた所であったのであろう。「まさりがほ」は「優り顔」で、他の誰より幸せである、暮らし振りがよい、といった顔つき。本話とは異なり、男のねちねちとした恨み節が不快である。寧ろ、まだ「伊勢」で、この二つ前にある類型話をカップリングさせると、本話の濫觴の風景が見えてくるようにも思われる。以下にその第六十段も示しておく。

\*

昔、男ありけり。官仕へいそがしく心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて人の國へいにけり。この男宇佐の使にて行きけるに、ある國の祇承の官人の妻にてなむあるとききて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」といひければ、かはらとりていだしたりけるに、肴なりける橘をとりて、

五月待つ花橘の香をかげば

昔の人の袖の香ぞする

といひけるにぞ思ひ出でて、尼になりて山に入りてぞありける。

\*

これも少し注しておく、前に「官仕へいそがしく」とあることから分かるように、「心もまめならざりける」というのは「家刀自」（妻）に対して夫が多忙を口実に誠実ではなかったことを指している。「宇佐の使」は豊前国（大分県宇佐市）にある宇佐八幡宮へ天皇の即位や国家の大事・天変地異などの際に奉幣をする勅使で、「祇承の官人」（「祇承」は慎み仕えるの意）とはこうした勅使らに供奉して接待役を勤めるところの地方役人を指す。「かはらけとらせよ」「瓦笥」は素焼きの杯であるが、「かはらけとる」で酒を勧めるの意。「橘」柑子蜜柑は上古より酒の肴とされた。「いだし」ゲストたる勅使は簾中に居る。まだしも本話の方がマシであるのがお分かり戴けよう。

・「中務大輔」中務省の次官（同省长官である「卿」に次ぐ）で正五位上相当。天皇補佐及び詔勅宣下・叙位など朝廷に関する職務の全般を担っていた中務省は八省中最も重

要な省とされた。

・「兵衛の佐□□」「兵衛の佐」兵衛府の次官（同府長官である「督」に次ぐ）で従五位上相当。御所警衛・行幸の供奉・京師の巡視などを司った。兵衛府は左兵衛府と右兵衛府の二府があり、左右の近衛府（大内裏の中でも宣陽門・承明門・陰明門・玄輝門の内側の警備を担当し、行幸などの際の護衛や皇族・高官の警護も担当した近衛兵団）と衛門府（大内裏の外郭の中で建春門・建礼門・宜秋門・朔平門より外側で陽明門・殷富門・朱雀門・偉鑿門より内側の警備を担当すること職掌だったが、後には檢非違使庁によって奪われ、有名無実化した）と合わせて五衛府を構成した。「の」以下の「□□」は、底本の注によれば、実際には文字が詰めてあるものの欠字があったと推定される部分である。

・「此彼構て」あれこれと気を配って。妻問婚であったこの当時、婿の衣食住の世話は妻の家で調えるのが常識であった。

・「煩て、日來に成にければ」病いに伏せるようになって、それが永がの患いとなってしまったので、の意。

・「便無く成」父母の死して経済的援助受ける背景を喪失してしまったことを指す。

・「繚」「繚」はまとう・まつわるの意で、「其」は対称の人称代名詞で夫の身辺周囲、その彼の日常の世話を指す。

・「何でか見苦くても御せむ」以下の夫の台詞の「何かで見棄むずるぞ」、同じ妻の台詞「何かでか、此ては官仕へはし給はむ」と同じく、反語。

「吉からむ様」あなたが良いと思われるように。あなたがこうしたいと思う通りに。

・「只成りに成り持行けば」ただもう矢継ぎ早に見苦しくなってゆくばかりなので。

・「外也とも」他所へお出でになったとしても。あなたが他の女性とお暮らしになられたとしても。

・「家も澄て」がらんとして。

・「音信」先のは「訪問」の意であったが、ここは「手紙」。

・「出て其れも云はむや」底本の池上氏の脚注には、『（女の方から）表面に出て手紙が来ない不満など言うはずもなく。このあたり解釈に諸説がある』とし、小学館日本古典

全集（馬淵和夫他訳注昭和五一（一九七六）年刊）「今昔物語集四」の頭注によれば、『この一句、意・接続ともに不明。あるいは、前後に脱文あるか』とする。現代語訳では池上氏の注を参考させて戴いた。

・「長宿直」当時は地方荘園の侍が、京の当該荘園の領主の邸宅に於いて長期間に渡って宿直（とのい・夜間に貴人に近侍する警固役。）の当番を勤めるために上った。

・「嚴氣」美し気。元来は、威厳を持つている・堂々として立派であるの意であったが、容姿・態度が優れている・美しい・心が穏やかで非の打ち所がないの意となった。

・「將下て」「將る」「將」の原義は「率いる」「従える」である（は「率る」とも書く。

・「切に切て」「前は「頻りに」で副詞、程度の甚だしいさま、ひどくの意、後の「しきり」は動詞「頻る」で度重なる・何度も続いて起こるの意。

・「何かでか然る事はせむ」反語。どうしていままでの京での暮らし方を変えることなど出来ましようや、いえ、出来ませぬ、という申し出への拒絶である。

・「弓など持て、其の夜、其の邊を行ければ」これはこの男が女を怖がらせて、次のステップへと向かうために行った戦略である（私は流れから見えて尼の提案によるものと考え）。足音や物音、それに感じた「狗」の「吠」え声と、ホラー効果を否応なく上げて女を恐怖させるのである。弓は自身の護身・魔除け（鳴弦用）のためであろう。

・「嗚」原義は小児の泣き立てる声で、そこから怒る・喧しいの意となった。

・「男、此の京の人の許には寄も不付ず成にけり」以下、父郡司の家の婢となっていることから見て、男は今日からこの女を連れて近江に戻ったが、自分は正妻の家に戻って、連れて来た彼女は実父である郡司の館に住まわせておいたと推定出来る。

・「新しく守成て下給ふ」郡司の上司である国守（国司）の任期は四年（初期は六年）。

・「國擧て騒ぎ合たる事限無し」小学館日本古典全集の頭注には、『新しい国守を迎えることはその地方の人々にとっては政治そのものが新しくなることであり、租税その他のことで期待と不安があった』とある。

・「守の殿」「かう」「かみ」の転音で高官のこと。国守の敬称。

・「器量く調へ立て」盛大な饗応の準備をして。

・「京の」彼女の呼称。「京の者」の謂いであろう。

・「年來」郡司の息子に捨てられて相応の時間が経過していることを示す。  
・「異下衆」彼女以外の他の下人。  
・「小舎人童」貴人の雑用係の少年。特に近衛の中将・少将（三衛（近衛府・中衛府・外衛府）における三将官制官職の第二位・第三位。平安初期の衛府制改革によって三衛が左右近衛府に整理統合されて以降は左右近衛中将を指す。ともに四等官制の次官に当たる）が召し使った少年を指す。彼女の元夫は、夫であった頃に兵衛の佐であったから、そこから着実に転任・累進したことが分かる。

・「然々の郡司の徒者也」底本の池上氏の脚注には『「從者」が正か』とある。  
・「傳立て」「傳」は音「フ」で、大切に種々の世話をすることを意味する。  
・「早う」副詞で、なんと、驚くべきことに。ある事態に初めて気づいたことを示すが、後文に「然も否心不得ざりければ」とあることから分かるように、これに気づくのは本話柄の語り部である点に注意されたい。

・「睦まじかり」近親のように親しく心惹かれる、の意。  
・「とよ」格助詞「と」+間投助詞「よ」。文末に用いると詠嘆の意を添える。  
・「京なむ有らめ」底本脚注に『「になむ」が正か』とある。  
・「なむ許云ければ」底本脚注に『「なむど」または「など」が正か』とある。  
・「被仕けるにこそと有らめ」底本脚注に『「と」は衍字か』とあり、小学館日本古典全集の頭注には、衍字かとした後、『あるいは、……というのだろうかぐらいの気持で用いられたものか』と附す。

・「娥く」「娥」（音「ガ」）は単漢字では美しい・器量が良い・見目良いの意。小学館日本古典全集の頭注には、『今昔物語集』では特に麗しい『女の形容』や『香の匂い』『など、女性的な感じを受ける場合に用いられ』ているとある。  
・「可然きにや、哀れに糸惜と思へば云ふぞ」底本脚注に、『しかるべきわけ（前世からの因縁など）があるのだろうか、しみじみいとしく思』えばこそかく言うのであるぞ、とある。

・「舊き男にて有し人の故などにてもや御ますらむと思ゆれば」小学館日本古典全集には、『前の夫であった人の縁故の方などでいらっしやるかと思いましたので。昔の夫と

少しも気づかず、また知られないように意識している心情であろうが、数年前に別れた男女がお互いにわからなくなるといふ筋立てはいささか無理。『いくら風体は変わっていても、昔の人と気づくのが自然であろう』と注するが、これは寧ろ「いささか」無粋な注と言いたくなる。

・「奇異あさましくて」原義の吃驚するほど意外だの意。後に意味として付帯してくるところの批判的ニュアンスはない、と私は読む。

・「然る氣無しに持成しれて有る程に」小学館日本古典全集の頭注には、『元の妻が零落したことに對する心の驚きを無理に押えた態度をとっている時に』とある。

・「江」近江。

・「怖しや」小学館日本古典全集の頭注には、『京の相当の身分の妻のだった女にとって、ひなびた地方の海のような荒々しい音は恐ろしかったのである』とある。当時の近江の国府は滋賀県大津市大江神領にあったことが分かっている。ここは琵琶湖の南端瀬田川に掛かる現在の瀬田大橋右岸側から一・二キロメートルしか離れていない。郡司が近江国の中の郡であったかは分からないが、少なくとも琵琶湖の沿岸ではなかったことが知られる。

・「これぞこのつひにあふみをいとひつゝ世にはふれどもいけるかひなみ」「あふみ」は男女が逢瀬をするその二人の「逢ふ身」と「近江」の掛詞で、さらに生きる「甲斐」に琵琶湖の「貝」を掛ける。「なみ」は上代表現で形容詞「なし」の語幹に原因・理由を表わす連用修飾語を作る接尾語「み」がついたもので「ゝがないので」「ゝがないから」の意を示す。底本注で池上氏は『これこそ近江の湖の音だよ。これまで逢う身（近江）を避けて過ごしてきたが、あなたと一緒にでなければ、生きている甲斐がない』から、と通釈されておられ、また小学館日本古典全集では、最後の句が『いけるかひなし』となっており、『男が女を前妻と知って、自分が真に愛情を抱いていたことを今確認したと告白し、逢う瀬を喜び、夫であることを名のる歌』と解説している。……しかしこの手放しの言祝ぎの歌こそが、ざわざわとひた寄せる妖しい水界と逢魔が時に感応し、曰く言い難い、境涯の哀しみとその恥ずかしさの余り、魂たまも消え入らんとしている女のそれを増幅させ、遂にはその命をも奪ってしまうのである……

・「氷瘥ひえすくみければ」「癖」は音「シ」で手足の引き攣ることを言う。小学館日本古典全集では『死後硬直』とするが無粋である。これは重度の痙攣症状、ヒステリー弓を指しているとは読む。

・「男の心の無かりける也」小学館日本古典全集の頭注は「こ」を批判して、『もともと歌を中心に作られた物語であろうから、これを「男の心なさ」で締めくくるのは酷で、編者の文学的感覚の乏しさを語ることになろうか』と評しておられるが、説話集としての型として教訓を附すのが定式化している「今昔物語集」にあつて、かく指弾すること自体が寧ろ、私には「酷」と思われる。但し、確かに「男の心の無かりける也。其の事を不顯さずして、只可養育かりける事を」とぞ思ゆる」という一文は本話にあつては聊か瑕疵とは言える。

#### 【附説】

堀辰雄の「曠野」では、トリック・スターである軽薄な田舎の青侍の出演が大幅に減ぜられて、悲恋の湖の深淵に一途に静かに読者が沈み得るように創られてある。しかも、原典にある、青侍が女の対の屋の辺りを企略を以つて徘徊するというシークエンスを、そっくり元夫が忍んで垣間見する印象的なものに換骨奪胎したのは、原典を超えて優れて辰雄調のオリジナルな恋愛世界にメタモルフォーゼさせた一番の手柄と言える(但し、原話のこの場面も、これはこれで原作に於いて次の展開への極めて自然リアルなテンポを与えてもいるのであつて、原作者の「才」をこそ寧ろ私はここに感ずるものでもあるのである)。

なお、辰雄は後半の再会のロケーションにやや手を加えていて、再会は公庁の国府館ではなく、郡司の屋敷という設定にしてある。これは、原話が再会の貢納の場の段以降、実際には女(京の)と郡司とが慌ただしく国府館と郡司の館を行き来する五月蠅さを嫌ったものであろう。確かに辰雄の方がずっと落ち着いてしみじみとしており、最後の悲劇的なコードへのジョイントもすこぶるよい。

ただし、私はそうした操作の結果として、看過出来ない矛盾が生じているようにも感ぜられるのである。それはこの郡司の館の位置の問題である。郡司の館については、

元夫である新任国守が着任早々、国内巡検に出た際、「郡司の館のある湖にちかい村にかかったときは、ちやうど冬の初で、比良の山にはもう雪のすこし見え出した頃だった」と述べている。この「比良の山」は古くから近江八景の一つとして知られる「比良の暮雪」の比良、現在の滋賀県琵琶湖西岸に連なる比良山地（最高峰は武奈ヶ岳で二一四・四メートル）を指す。このシーンは振り仰いでいるのではなく、遠景に雪を頂く比良の山々を見た謂いであろう。とすれば「曠野」の方の「郡司」が治めていたのは琵琶湖の東岸の南、後代の郡区分ではあるが、滋賀郡・蒲生郡・愛知郡・犬上郡辺りでなくてはならない。しかし何故それが齟齬と私が言うのかというと、辰雄の言うように、「郡司の館のある湖にちかい村」という設定では、最後の印象的な、女が琵琶湖の打ち寄せる浪の音を聴き馴れぬ不思議な怖ろしい音と聴いて最後に問いかけるといふ大切なシーンが、如何にも奇異に映るからである。

実際、私は「曠野」を最初に読んだ際、この女は哀しみと恥ずかしさの余り、精神に異常をきたして、幻聴と言わぬまでも、湖畔の浪音が異様に増幅して聴こえたのであるか？……はたまたそれは不吉な死を呼び込む魔性の「音」であって、実は浪の音ではなかったのではないか？……（或いは無料にも）彼女はこの瞬間、脳溢血等の症状をきたしており、その場合に耳の背後で聴こえるというざわざわという音を幻聴しているのではなからうか？……といった藪医者の推理まで仕出かしたのであった（無論、こうした視聴覚的な対象の見当識欠如は「伊勢物語」や「源氏物語」に現われる如く高貴な出の女の典型的カマトト属性ではある。それでも普段聴いたことのある音を怖れるという嘘を彼女らはつかないであろう）。しかし、私は寧ろ原話では——郡司は近江の国でも有意に湖岸からは離れた（湖岸の浪の音が聴こえない程度に。但し、国司庁と数時間で行き来出来る程度の位置に郡司の館はある）東の方の郡（野洲郡・甲賀郡などの内陸地域）域を治めていた——だからそこで婢として仕えていた（京の）は琵琶湖の漣さえ知らない——だから『江の浪の音聞えければ、女、此れを聞て、「此は何にの音ぞとよ。怖しや」と』言ったのだ——と考えて初めて腑に落ちるのである。少なくとも原話のくだしい（京の）が毎晩郡司の館と国司館を行ったり来たりする事実の背後に、逆にそうしたすこぶる「自然」な事実が隠されているように私には思われるのである。



■やぶちちゃん現代語訳

中務の大輔の娘、近江の郡司の婢となつたる話 第四

今となつてはもう……昔のことじゃが……中務大輔であられた何の何某と申さるる御仁の御座つた。男の子はのうて、娘子ただ独りだけがおられた。

その頃には既に家内不如意にて御座られたが、兵衛佐何の誰彼と申さるる御方を、その娘に娶わせて婿となし、年月を過ぎしておられた。この間、貧しき中にも、これ、なんやかやと遣り繰り致しては、婿殿のお世話をなさつておられたによつて、かの婿も、その娘の許を去りがとう思つておるうち、中務大輔殿、これ、亡くなられてしもうた。されば後見は御母堂一人ぎりとなつて、娘は何かと心細く思つておるうち、その母君もじきに病いにお臥しになられ、永く患いついて御座られたによつて、娘はたいそう深う悲しみ歎いておつた。ところが結局、その御母堂も亡くなつてしもうたによつて、娘独り、取り残され、泣き悲しんでおつたものの、最早、かくなつてはどうにもならなんだ。

すると、次第に家内に仕えておつた者どももこれ、皆々、出て行つてしまい、すつかり人氣ものうなつてしもうたによつて、娘は夫の兵衛佐に、

「……親のあらしやいましたうちは、なんとか致しては、あなたさまのお世話をし申し上げて参りましたものの、このように、たよれる生計の方もおらずになりましたによつて、最早、あなたさまのお身の回りのお世話をさえ叶わずになりました。……どうして……宮仕えにお見苦しいお姿であらうしやるなどということが許されましよう。……これよりは、ただ……あなたさまの——よきように——おとり計らいなさられて下されませ……」

と申したによつて、男はこれを聴き、ひどう不憫に思つて、

「……どうして！ そなたを見棄てるようなことをするものか。」

などと答えては、なおも女の屋敷にともに住んではおつたものの、じき、出仕の装束

なんども見苦くなつたかと感じたかと思うと、みるみるうちに、みすばらしゅうなりゆくことの著ければ、妻は、

「……どこか外の方へ移られなさっても……妾をいとおしゅう思し召された折りなどには、またお訪ね下さいませ。……どうして……どうして、このようなお姿にて宮仕えなさるることのできましようや。あまりに見苦しゅうございます……」

と、しきりに勧めたによつて、男は遂に屋敷を去つて行つた。……

さればこそ、女ひとりとなり、いよいよこの上もなきほどに、悲しく心細き思いをつのらせておつた。家もがらんとして、人氣も、これ、ない。……ただ独り残つておつた幼き女童が一人御座つたものの……これもまた、着る物にも、もの食うことにも事欠くありさまとなつたなれば……ふと気づいた時には、どこぞへ去んで、姿の見えずなつて御座つた。……

さてもかの夫はと申せば、これ、初めのうちこそ『如何にも不憫』と、思うて気にはかかつておつたものの、じき、他の女の婿になつたによつて、かの女へ手紙を送ることさえものうなつて御座つた。女の方も、手紙の来ずなつたことへの不満などを表立つて言い遣ることなど、これもまた、思ひの外のこと御座つたれば、結局、出でて行つたきり、二度と、かの女の許を訪ぬることは絶えてしもうたと申す。されば女は、これ、見るもおぞましく壞つたる寢殿の片隅に、ひっそりと独り、住まうておつた。……

さて、その寢殿のまた片端に、これ何時の頃よりか、一人の年老いたる尼の住みつくようになつて御座つたが、この尼、かの女の境涯を気の毒に思うて、時に、果物やら食ひ物やらの余れるものあれば、それをもち来たつては恵んでおつた。されば、ひとえにその恩恵を唯一つの糧となして、女は年月暮らしておつたのであつた。ところがそのうち、この尼の許へ、近江国より長宿直と申す役に当たつたとして、とある郡司の子なる、一人の若き男が上京致いて参り、宿をとつた。さてもこの若者、とある日のこと、その尼に向いて、

「——体からだを持って余あましておる女童めづらわでも一人、これ、世話して下さらぬかのう？」と申した。尼は、

「……我れらは年老ねんじやういて外歩げいほきなんどもようせねば、何処どこに女童めづらわのおるかというようなことも知らぬ。……じゃが……そうじゃ！……このお屋敷おくしきにこそ、たいそう見目麗みめれいしくあらつしやいます、姫君ひめぎみの、たった独り、いかにも現うつにあらんこともなきように……あらつしやいますかのう……」

と応じたによつて、男はそれを聴くや、

「——そ、その女、我らに会あわせて下さつしやれ！……さてもさても！……そのようにお心細こころこまくてお過あやしになさるるよりは——事実じじつ、ほんに、お美しいお方かたならばこそ——一つ、国くにへ連れ下くだつて、我らが妻つまにもしようと思おもう！」

と大乗り氣おほりきに言うたれば、尼は、

「ならば、近々ちかぢか、その旨しづめ、伝えてみましょうぞ。」と請こけがった。

この男、こう言い出してよりそのかた、尼に——先の話は通して下さったか？——何？——まだ？——何故なにが、まだお話下かたさらぬのじゃ？！——早はやう早はやう！……と、頻しばしばりにせつついては責め立て参まゐつたによつて、尼は仕方なく、かの女の許もとに、いつものように果物くだものなどもて行きたるついでに、

「……このように……このまま（う）して……いつまでもお独りにて身過みあぎなさつておらるるわけにも、これ、参まゐりますまいに……」などと水みづを向けた後、

「……さても……実はここに、近江おうみより然るべき御身分おんこゝろの御方おんかたの御子おんこの、上京じやうきやうしておられますが、この度たび、このお屋敷おくしきの御主おんぬしであらるる、あなたさまのことをお話申し上げましたところが、『そのように不如意おんこゝろのままに御座おんざしまさるるよりも、自分の国くにへともにお連れ申し上げたいものじゃ』と、これがまあ、すこぶる熱心ねつしんに申しておられますのじゃが……一つ、そのようにさせなさいまし。……このように……何もなさることものう、お淋さみしきままに、お暮くらしなさいまするよりは……」

と懲憑致いたところが、女は、

「……ど、どうして……どうしてそのようなること、これ、出来ましよう。」  
ときつぱり否んだによつて、尼はその場は引き下がって帰った。……

この男は、尼より事の不首尾を聴くや、いやさかに女への思いを切に募らせ、その日の夜になるや、弓などを携え、その女の対の屋のほとりへと参った。されば、辺りにおつた野良犬のこれを嗅ぎつけ、大きに吠えたてたによつて、女は普段にもまして、もの怖しゆう感じ、もの凄き思いに怯えて御座った。夜の明けて後、かの尼、また何食わぬ顔をして、女の許へと訪れたところが、かの女の曰く、

「……昨夜は、もう……まっこと……どうにも……もの怖ろしゆうて……なりませなんだ……」

と訴えた。されば、尼、すかさず、

「だから申し上げたので御座いまする！——かのように申す者に、うち具してお下りなさいませ——と。……かく身過ぎなされておられたのでは……これ、やりきれぬことばかりしか、起きは致しませぬのでは、御座いますまいか……」

と、上手くまたしても水を向け得たによつて、女も『まことに一体どうしたらよからうか』と思うままに、如何にも逡巡する気色を見せて御座った。さればこそ尼はこれを察し、その夜——こつそりと——かの男を女の対の屋へと導き入れたので御座った。……

それより後、男はすっかり女に夢中になった。——田舎の侍なれば、こうした京のやんごとなき娘のそれは、初めての味わいにて御座ったによつて、もう一夜にして離れがたく思うて、長宿直の明くるや、早々に近江へと連れ下つて御座った。女も『かくなつては最早、致し方のないこと』と思うて、ともに下つたのであった。ところが、近江に着いて見れば、この男、前々より国元に既に妻を持って御座ったことの知れた。女は取り敢えず、父郡司が家に住むこととなつたものの、その本妻たる者、じきにこの女のあゝるを聴き知り、ひどく妬み、男を激しく罵つたによつて、男は結局、この京から連れ帰つた女の許へは一向、寄りもつかずなつてしもうたのじやつた。されば、この京の人、

親の郡司に使われて、身過ぎ致すことと相い成って御座った。すると、そのうち、その国に新しき国守の決まって、お下りになられるということになったことによって、これはもう、国を挙げての大騒ぎと相い成って御座った。

そうこうするうち、

——早や、守殿が国府へお着きになられた！

という報知のあれば、女が仕えておった郡司の家内も大騒ぎとなつて、果物やら食べ物などの饗応の品々を立派に調べ揃え、国司の館へと運ぶ込むこととい相成った。——その頃、この京の人のことを父郡司の家では〈京の〉と名づけて、郡司のお気に入りとして永年、婢として使つていたのであつたが——館へその物品々を運ぶに際し、多くの男女が要つたがため、この〈京の〉にも、物を持せて館へと向かわせたのであつた。

さても、守は館にあつて、多くの下々の者どもが、これ数多の品々を持ち運び来たるを眺めて御座った。すると、その中に、他の下人らとは異なり、これ、なんとも言えずそそらるる面持ちをしたる「京の」が、守に目に留まつた。されば、守は御自身の小舎人童を召し出だして、こつそりと、

「あの女は如何なる者であるか？ それを訊ねて——今宵——我らが方へ連れて参れ。」と命じられた。小舎人童が仕切を致しておる下役人に訊ねたところが、しかじかの郡司の婢なることが知れた。されば小舎人童はその場に参上して立ち会って御座った郡司に、

「……かくの如く、守殿の、女をご覧じなられて……かく仰せられております。……」

と耳打ち致いた。郡司は大きに驚きて、家にとつて返すや、ともに連れ帰つた〈京の〉に湯浴みをさせるやら、髪を洗わせるやら、大働きの世話をなし、頭の天辺から足先に至るまで、これ、念入りに磨き立ててやつた。その装いの成つたるを、郡司、いちいち点検致いた末、己れの妻に向つて、

「これ見よ！ 〈京の〉の着飾つたるこの見目の、なんとまあ！ 麗しさを！」

と感嘆致いたと申す。さても、その夜、衣きぬなどをも羽織らせ、守のおらるる国守の館へと、この〈京の〉をさし出だいたのであった。

——ところが！ さてもまあ、なんと！ この新任の近江守おうみのかみと申さるる御方はこれ、かの〈京の〉の本の夫、兵衛佐ひょうえのすけであられた御仁の、大成なされたお姿で御座ったんじや！——……さても守は、この〈京の〉を近くへお召し寄せになられ、とくと見ようとしたところが、如何にも不思議なことに、いつかどこかで見たことがあるようにお感じなられたによって、この〈京の〉を抱いだいて添い臥したところ……なにか……まっこと……親し気で懐かしい感じが……身体からだから伝わって来るのであった。されば、  
「……お前は一体……如何なる素性の者じゃ？……何とも不思議なことに……いつかどこかで逢ったことのあるように、これ、思えてならぬのじゃが。……」  
と女の耳元に口を寄せて囁いたが、女はしかし——この男がまさかかつての夫兵衛佐であらうなどとは思ひもよらざれば——、

「……妾わいひはこの国の者にては御座いませぬ……かつては……確かに京におりました者にては御座います……」

と言葉少なに答えるばかりであった。守は、『……京の者が田舎へと落ちて参り、郡司の館に使われておるに過ぎぬということなのだろう……』と勝手に想像したりして御座ったが、この女の麗しさが如何にも希有のものに感ぜられたによって、それより毎夜召し出だいては夜伽させた。すると、なおも、身も心も摩訶不思議に異様な懐かしさの貫くを覚え、どうもやはり、一度逢ったことのある女のように思われてならなかった。されば、守は女に向い、

「——さても、京にては如何なる身分の者で御座った？ さるべき前世より結ばれし因縁に依るものにもあらうか、実はなんとも、しみじみと、いとおしく思われるればこそ、こうして問うておる。一つ、隠ひそさずに言うてみよ。」

と質たいたによつて、女、もはや隠すことの出来ずなつて、

「……実は、まことは……しかしかの者にてございます……もしや……あなたさまは……妾わいひの古き殿方であられたお方の……その所縁ゆかりのお方などにも、あらっしやるか

とも存じましてございましてによつて……このお召しを受けてよりこのかた、それを口に致すことを、これ、憚つてございしましたが……そのように強いてお訊ねになられましたれば……お答え申し上げましてございます……」

と、ありのままに語つて、そのまま、泣き伏してしまつた。守は、

『……さればこそ！ 不思議に懐かしく思われておつたも道理！……こ、この女は、やはり！ わ、私の——昔の妻——であつたのだっ！……』

と思ふにつけても、何とも言えず胸の詰まつて、ともすると涙が零れ出でんとするを、女に気取られぬよう、さり気なく振る舞うて御座つた。するとその時、琵琶湖の湖水の浪の音が聴こえてきたのだつた。女は、これを耳にすると、

「……こ、この……音は……何の音なのかしら？……ああっ！ 怖いこと！……」  
としきりに怯えて御座つたによつて、守はそこで、かく和歌を詠んだ。

これぞこのつひにあふみをいとひつ

世にはふれどもいけるかひなみ

そうしてすぐに、

「——我れは——まっこと！ そなたの夫ではないか！」

と小さく叫んで、涙を流した。すると女は、

『……ああっ！……さてはやはり……この人は私の元の夫その人であつたのだ！……』  
と心づいたものか、そうしてその途端に、心の内に言いようのない哀しみと恥ずかしさが怒濤の如く襲い來たつて、遂にはそれに耐えられずなつたものか——ふつと——ものも言わずなつて——守が咄嗟に抱き寄せた、その身は——意識もすでになく——手足も痙攣して硬直致いて……そのまま……ただただ、冷えに冷え入つてゆくばかりであつた。

守は、

「……こ、これは！ いったい！ どういうことかツツ！……」

と喚き騒いでいるうち、女は儂はかなくなつていた。……

筆者の思うに、この主人公の女、これ、まことに哀れな存在である。女は『……ああ  
っ！……さてはやはり……この人は私の元の夫その人であったのだ！……』と心づくや、  
己おのれが前世より業ごうとして背負うてきた因縁の思いやられて、その哀しさと恥かしさに耐  
えきれずに遂には死に至ったのである。守かみなる男には、最も大切な、傷心の女への思い  
やりの心が決定的に欠けていたのである。その事実——自分が元の夫であるという事実  
——を明らかにせず、ただただ、この幸薄ゆはくかった女を引きとり、よく世話をなしてやれ  
ばよかったものを、と思うのである。

なお、この事件については、女が死のちして後、この男がどうしたかについては、これ、  
よく分からないと、かく、語り伝えているとかいうことである。